



# 門上千恵子

—女性法律家のパイオニア—

白梅学園高等学校校長  
白梅学園清修中学校校長

樋口秋夫

## はじめに

白梅学園は、その前身東京家庭学園から数え七十年になるろうとする歴史がある。そこに関わり足跡を残した先人には、さまざまな分野で主導的な活躍をしたり、先駆的な役割を果たした人物が多くいる。

わが国初の女性検事という経歴、集英社版「女たちの20世紀・100人―姉妹たちよ」に選ばれたり、九十二年の生涯をおえるまで現役弁護士として活躍していたことでも

つとに知られる門上千恵子もそんな一人だった。

その千恵子と白梅学園の関わりは戦時中まで遡ることが出来、以来終生にわたり絶えることなく、夫君の門上秀叡と共に、学園の発展に愛情を注ぎ、温かいまなざしで学生・生徒の成長を見守っていた。

それはほんとうに役職や責務を超えたものといつてよい。千恵子自身の人間性によるところが多いのだが、「何か不思議な強い絆で結ばれていた」という人間関係もあつた。

今回、この小文は、千恵子の女性として先駆的な生き方の原点を辿ること、また白梅学園との関わりについて記したいと考えた。それは、学園関係者たる筆者の、門上ご夫妻に対する限らない感謝の念、そして記憶をとどめたいという発意にほかならない。

なお、文中の敬称は省略させていただいた。

## ふねむつ松前かい

千恵子は、一九一四(大正三)年一月八日、愛媛県伊予郡、現在の松前町で米屋を営む父福樺繁太郎、母モモヤの間に長女として生まれた。松前は瀬戸内海に面し気候も温暖であり古くから海産物の加工で栄えた場所で、「坊ちゃん」や「司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』」で知られる四国最大の都会松山市の中心部から伊予鉄の電車で十五分ほどの距離にあり、後背地としての役割をもつ土地柄である。

因みに、松前は「まさき」と読み、北海道松前町(まつまき)とは同じ漢字表記を用いている関係で姉妹都市提携を結んでいる。

両親は、女子が教育を受けることに対して大変理解があり、千恵子もこれに応えた。妹のアヤ子によれば、「非常に聡明で優しいお姉さん」であったという。

一九二七年四月、千恵子は松山市の松山高等女学校(現

松山南高校)へ入学する。市中心部に位置する県下女子教育の名門である。この時代、大正デモクラシーを追い風に教育への意識が高まり、高等女学校への進学率も全国で十五%程度に伸張したという背景もあった。

一九三二(昭和七)年、広島県立女子専門学校の国文科へ進学する。当時、四国にはまだ女子専門学校がなく、この地域から上級学校に進学するためには、県外に出る必要がある。地理的に広島や岡山、九州が候補地となるのが一般的であった。女子専門学校は、旧学制下の女子学生に対する高等教育機関として、女子高等師範学校および専門学校令による私立女子大学とならび、最も上位の高等教育機関であったが、高等女学校からの進学は一部に過ぎない。このことから、女子が親元を離れ高等教育を受けるといことが大変なことであったことが理解できる。

## — 帝国大学に学ぶ —

一九三六(昭和十)年四月、千恵子は九州帝国大学法文学部への入学を果たす。女子の「帝国大学」への入学が世間の耳目を集める時代であった。

九州帝国大学は、一九一一年に創設され、キャンパスは福岡市箱崎天満宮の近くにあった。法文学部は、一九二四年に設置され、初代学部長は美濃部達吉である。

そもそも帝国大学は、旧制高等学校卒業生のための上位教育機関であって、傍系と呼ばれる師範学校からや女子の入学そのものを想定していなかった。そんな中であって、一九一三(大正二年)、東北帝国大学が初代総長沢柳政太郎の英断によって女子学生の受入をはじめ、以後断続的に九州帝国大学、北海道帝国大学がこれに続いた。

このような状況下、進学先は福岡か仙台に限定されていたわけで、九州帝国大学への進学は、ある意味で自然な成り行きであった。国文科出身の彼女がなぜ法律学科を志望した深層は定かでない。しかし、進学ひとつにしても女性には差別されていたわけで、このような時代状況とも無関係ではなかったと思われる。

当時、法文学部には五名の女子学生が在籍していたが、千恵子は法律学科として唯一そしてはじめての女子学生であった。世相的には二二六事件が起り、日中戦争がはじまった頃であったが、「静かな落ち着いた雰囲気と自由な科目を選び、講義を聞くことができた」ということである。

ここでのよき師、よき友との出会いは、以後の活動の財産となった。勉学は一所懸命だったようで、政治学の講座でなかなか出ない優を取るために頑張ったことや国際公法では教授の一言一句をもらさずノートに書き留めたことなどの逸話も残っている。

中でも民法の教授舟橋惇一との出会いが、生涯の仕事として法曹の道を選ぶことになった。千恵子が「我が愛する母校九州大学へ」と題し寄稿した「同窓会報」によれば、法学部の階段教室でむさぶるように教授の民法総論、物権法の講義を聞きました。ある日教授は講義を終えて、福柳君と声をかけて下さったのです。「僕の講義がわかるかね。研究室にいらっしやいと言って下さったことが、私の生涯の仕事、法曹の道を選ぶきっかけとなったのです。」とのことである。

また、千恵子は「九大佛教青年会」に入会している。一九〇七年に設立された、仏教精神に基づく奉仕活動を行ういわばセツルメント的な団体である。当初は医療活動が主であったが、後に「法律扶助部」が開設された。千恵子もここで無料法律相談を担当し、地方巡回を行った活動は「思い深いことであった」としている。法律を人間の役に立たせたいとするこの活動は、法律家門上千恵子の出発点ともいえよう。

このように九州帝国大学では、勉学に奉仕活動にと充実した学生生活を送っていた様子が窺われる。環境にも恵まれたこともあるが、唯一の女子学生という自負も大きかったと思う。その甲斐もあって、一九三七年には「羅馬法研究」で帝国学士院から賞を授かる榮譽にも浴した。しかし、決

して悲壯感漂うガリ勉タイプではなかったようで、時には麻雀大会にも顔をだしたり、試験での好成绩を祝し仲間たちとビールで乾杯したということも聞く。

一九三九年(昭和十四)三月、千恵子は九州帝国大学を卒業する。時に二十五歳であった。前出の「同窓会報」には、「九州大学で学んだことは、人間を愛し人間の価値を最高度にしようとするヒューマニズムの理念だったと思います。母校の先生方の講義は、ヒューマニズムの理念に基づいた講義でありました。未だうら若き乙女であった私の心の中に焼き付いております。」とある。

同年四月には、岡山県にあった林野高等女学校(現林野高校)に教諭兼舎監長として着任した。ここでは「英語」を教えていた。しかし、ここの勤務は一年であった。一九四〇(昭和十五年)年には、再び九州帝国大へ戻ることになった。

法学部の研究室では副手、次いで助手として一九四四(昭和十九)年三月まで勤務する。この間の一九四三(昭和一八)年七月、高等文官試験の司法科試験に合格する。今でいえば司法試験である。これに合格すると所謂法曹三者(判事、検事、弁護士)に登用される資格が与えられるのであったが、実際女性が判事、検事になる道は閉ざされていた。わずかに、一九三六年の弁護士法改正を受けて、

一九四〇年に初の女性弁護士三名が誕生したに過ぎない。千恵子は、一九六二年二月にNHKの「それは私です」に出演した中で、「元々私は学問として法律を勉強し、ゆくゆくは教授にでもなるつもりでしたが、法律の面でも女性が軽く見られていることに不満を持っていました」と自己紹介しているが、研究者から法曹の道を志した背景には、恩師舟橋教授の導きと同時にこのような動機付けもあったのである。

なお、女性がはじめて高等文官試験司法科試験に合格したのは一九三八年のことであり、一九四八年までの間に八名が合格した。

## 戦時下の東京生活

一九四四(昭和十九)年四月、千恵子は五年にわたる福岡での学生生活に別れを告げ上京する。「軍事保護院」の援護会監事に赴任するためであった。この組織は、もともと戦傷者保護を目的とした「廃兵院」を起源とし、同時に遺族支援なども行っていた。当時は厚生省の外局として戦傷者のみならず婦人の教育訓練などもその範疇に含まれていたのであった。

千恵子の初仕事は、指導課長代理として「勤労女子青年錬成所」の指導であった。この錬成所は、戦時統制の非常

措置により白梅学園の前身東京家庭学園が改組を余儀なくされた学校である。

千恵子は当時を、「思い起こせば白梅学園にお世話になるようになったのは、九州帝国大学の学窓から社会の第一歩を歩み始めた一九四四年の四月頃からで、国家総動員法の下に、国民の全てが戦争へとかき立てられていった、その真っ只中でありました。学園も学生も好むと好まざるとに拘わらず、否応なく戦時体制下に引きずり込まれていた時でした。私は、本務官職である軍事保護院から学園に出向を命ぜられたのです。悪い言葉で言えば、学園のお目付役に送り出されたのです。」として、ここで指導や講義をすることになった端緒を記している。

そして千恵子はこの、終生厚い友情を分かち合った樋口(当時は小松姓、後の白梅学園理事長、短大学長)愛子と出会うことになる。樋口は千恵子より三歳年長。家庭学園創立者小松謙助の長女で、東北帝国大学で心理学を学び、創立当時から主事として学校運営に携わっていたのである。この二人の関係については後述する。

さらにこの一九四四(昭和十九)年は、千恵子は婚姻により門上姓となった。二人の共通の友人が引き合わせ、もと「独身主義」であったが、知り合って程なく式をあげるという電撃結婚であった。築地本願寺で行われた仏前結婚

式には、小松謙助、樋口愛子ら錬成所(家庭学園)関係者も出席したという。夫君となる門上秀敏は北海道富良野出身の哲学者。後に東京経済大学(当時は大倉高商)の教授をつとめ、理事も歴任し、最後は名誉教授となった。ゲオルグ・クラウスの『記号論理学』の翻訳や古陶磁の研究などでも知られている。

千恵子にとってこの一九四四年は、上京、就職、女学校への出向、空襲、そして結婚など、身辺的には激動の時代であった。

## わが国初の女性検事

一九四五(昭和二十)年八月十五日、終戦を機に日本社会は激変した。女性の地位もそのひとつであった。日本における女性の地位は、旧憲法下の民法によって設けられた封建的、家父長的な「家」制度の下、法的にも低いものであった。これにより、参政権をはじめ有形無形の差別があり、社会的に女性に不平等な社会となっていた。

一九四六(昭和二十一年)十一月、新憲法が發布され、個人の尊厳と男女平等の精神がうたわれるようになった。翌年、千恵子は法務省に入る。そして、一九四九年七月、日本で初の女性検事となる。

旧制度での高等文官試験司法科試験合格者は司法試験免

除になり、裁判官、検事、弁護士という所謂法曹三者への道が開けていた。千恵子は躊躇することなく検事を選んだ。この深層は興味深いものがあるが、「九州帝国大学での学びはヒューマニズムの理念であり、この精神から、巨悪を眠らせてはいけないと法曹の道から検察官検事を選んだ」ということである。

検事としての千恵子は、「初の女性検事として職務についても、女性の立場から社会悪に対処してきましたし、これからもそうしていきたいと思っています。」というように、女性の視点からさまざまな活動を行った。

そのひとつが各分野を主導する女性たちと連携した活動である。この時代は、女性解放や平和運動などさまざまな婦人運動が一気に花開いた時期であるが、千恵子も樋口愛子等と共にこの輪に加わった。一九五〇年には、家事調査委員の田邊繁子、大浜英子、人権擁護局の渡部英恵子、判事石渡満子らと「婦人人権擁護同盟」の結成に加わり、当社会問題となっていた青少年少女の人身売買の実態調査や法律相談にあたっている。

一九五二年に射出義夫との共著として出版された『女性犯罪』では、女性犯罪者の実態をあげながら報告している。ここでは当事者たる検事ならではの体験に基づいて犯罪事実を検証しているが、女性のおかれている歴史的

視点や時代的背景への考察も忘れてはいない。千恵子はこの書の結語として、「根本は国家社会の構造そのものの問題であることを人々は知っている。日々無数に生起している一つ一つの問題の処理と取り組みながら、同時にそれがつらなっているこの根本まで思いをいたしながら、さし当たって出口をひらいているささやかな努力を積み上げてゆかねばならないことを思うのである。」と書いている。検事という立場から社会をよくしていこうと思いが込められた言葉である。

また、千恵子は検事としての生き甲斐を次のように記している。「世の中には、検事というと血も涙もない鬼のような存在だと思う方があるかも知れませんが、起訴猶予にした人が更正の手紙を寄越したり、元気な姿で訪ねてきた場合、心の底からやりがいを感じ喜びをいただいている検事の姿もぜひ知っていただきたいと思います。」。

## 白梅学園との関わり

先に述べたように白梅学園との出会いは戦時中に遡る。千恵子は、小石川の指ヶ谷町にあった「勤労女子青年錬成所」に、軍事保護院から「お目付役」として出向したのであった。この錬成所は、白梅学園の前身である東京家庭学園が決戦下の非常措置で改組を余儀なくされた仮の姿であ

る。もともと家庭学園は、社会教育協会の創立者小松謙助により一九四二(昭和十七)年に設置された女子のための教育機関で、初代学園長穂積重遠の下で自由や教養を重視した校風を特色としていた。

千恵子にとっても、この時点では、縁もゆかりもない学校であり、終生かわかることになるとは予想だにしていなかったに違いない。事実、初登校に際して事前の情報もなかったように、「どんな学校だろう」、「どんな先生がいるのだろう」と書いていた。それが、初対面の樋口(小松)愛子主事と意気投合し、その立場がすぐに変化している。

千恵子は樋口の印象を、「愛子先生と初めてお会いしたその日、意気投合しておそくまで、戦争のこと、結婚のこと等かたりあって、手づくりのさつまいもの煮付けをご馳走になり、警戒警報発令中お互いに手に手をにぎりしめて校門をでたこともいまでは思い出のひとなつています。」そして、「今後とも学園を宜敷ね」とぎゅっと私の手を握り締めたあの日から、学園・愛子先生とは切っても切れない関係となりました。」と記し、さらに「長い間求めていた友人に会ったような感じがして、この上もなく喜び、九州からのこのこやってきた甲斐があったことを、とてもうれしく、又その反面私の一面にあったような気がして恐ろしい感じもしたものでした。」と書いている。年も近く、共

に戦前の女性にとって狭き帝国大学の門をくぐり、学問と生きる道を模索した二人には、何か共鳴する部分があったのであろう。

戦時中とはいえ、錬成所(学園)は、各界の著名な学者を招くなど、名前から想像できない充実した教育を行っていた。また主事と生徒の人間関係が密接で、当時助手として勤務した田中未来(元白梅学園短期大学長)によれば、「教員と生徒が深い信頼関係で結ばれている此処こそが、真の教育の場であり、自分が長い間探し求めていた青い鳥を見つけた気持ち」というように、温かい雰囲気があった。

大学の研究室から社会への第一歩を歩み出した千恵子にとって、「軍事保護院」より、どこかベラルな雰囲気や音楽など文化の香りが残っていた錬成所に親近感を抱いたとしても不思議ではない。ここでの交流の様子は、千恵子の結婚式にも新婦側として小松謙助以下の教職員が出席しているし、樋口愛子などは新居の同潤会青山アパートにもしばしば訪れたということでも窺える。また、夫君秀叡氏も錬成所の生徒のための食料買い出しにかり出されるなど学園と関係がではじめている。

この頃になると戦局はもはや敗戦必至という状況で、東京は連日B29による空爆にさらされていた。千恵子は、一九四五年五月の大空襲で学園の建物設備一切が焼失し移

転先の仮教室で授業をしたことなどを、「悲しい乍らも、今は懐かしい思い出の一つになっている」と記しているが、極限状況の中で、「官」と「民」を超えた連帯感が形成されていったのも事実である。

一九四六(昭和二一)年、東京家庭学園は戦中戦後の苛烈な時代を克服し、新しい教育目標「生活の科学化、社会化、芸術化」を掲げ再開を果たす。その後、校地も小石川から杉並へと移転した。しかし、新天地での意気込みとは裏腹に、終戦から間もないこの時期、家庭学園のような教養を主体とする教育への志願者は少なく、生徒数は減少の一途をたどった。このような状況で学園の経営は大変な困難に直面していた。

そんな中、千恵子は「社会学」、「法学」、秀叡は「倫理学」担当の兼任講師として出講していたが、「学園草創期の学生は、狭い汚い木造校舎の中で、自信と誇りを持って生き生きと勉強していたことが印象的」と常に温かいまなざしをもっていった。そんなせいもあって、学園には物心両面の支援を惜しまなかった。当時をよく知る田中未来(元短大学長)によれば、「門上秀叡・千恵子夫妻をはじめ、多くの講師が学園の窮状を見かねて、講義料を辞退し、交通費まで自弁で、献身的に講義をつづげた」というような逸話もある。

そんな千恵子の人柄にふれて敬慕の念をいだく教職員、学生もふえてきた。第一線の女性というキャリアに対する憧れもあったが、気さくな人柄、その優しさ温かさに惹かれて「門上ファン」になった者も多々いたという。

また秀叡も白梅の学生の面倒をよく見た。卒業生たちに請われて「哲学」や「倫理学」の勉強会を主宰し、あるときは自宅で、あるときは新宿御苑で、またあるときは東京経済大学の学生も交じり、喧々諤々の意見を聞かせていたという。この勉強会は、後に「種蒔く会」となって長くつづいた。会のメンバーであった米山千恵(元白梅保育園長)によれば、自宅では議論もさることながら千恵子の手料理が振る舞われるのが楽しみであったという。

入学式、卒業式などの学園行事や同窓会などにもいつも夫妻で参加していた。短期大学同窓会では年一回、沖縄から北海道までの全国支部持ち回りで総会を開催しているが、夫妻の参加は恒例となっていた。門上夫妻に会うことが楽しみで遠くから参加する卒業生もいて、ある意味で古き良き「家庭的」な白梅学園の象徴的存在であった。

二〇〇二(平成十四)年九月、「門上先生ご夫妻を祝う会」が吉祥寺のホテルで開催された。これは千恵子の米寿、秀叡の卒寿を祝おうと、白梅学園と東京経済大学の卒業生が企画したものであった。白梅側は、家庭学園、短期大学同



窓会、種時く会が、東京経済大学側は門上ゼミと弓道部が中心となり、百名を超える盛会となり、参加者一同はこれまでの感謝と共にますますの健康を祈念した。千恵子はこの会の開催が殊の外うれしかったらしく、参加者全員に「あの嬉しい感激の日」ではじまる札状を出している。

## 生涯現役

千恵子は学園で「憲法」や「法学」を講ずるばかりでなく、一九八一（昭和五十六）年には理事に就任している。法律家としてはもちろんのこと、その幅広い見識、そして学園との歴史的なかわりの部分も嘱望されてのことであった。学園は、小平移転、短期大学の学科増、高等学校の設置などで規模も大きくなり、多様な人材を受け入れるようになり、「学園」という共同体意識をさらに強化することが必要な時期になっていた。したがって、この人選は建学の精神を承継するという意味でも時宜を得た必然的なものといえるのであった。おそらく、千恵子には、「心の友」であった亡き樋口愛子が心血を注ぎ育んできた学園の流れを大切に守つていこうという自負と使命感もあったにちがいない。理事の在任期間は実に三十有余年の長きにわたり、終生のものとなった。弁護士としてのみならず、家裁の調停委員、関東管区警察学校の講師など内外に多忙な日々を極め

る中、年数回の理事会にはほとんど姿を見せていた。公判から直接来校し、理事会終了後には接見のため留置場に出向くということもしばしばであった。

筆者は理事会で千恵子と度々同席しているが、機会ある事に「私学にとって建学の精神を継承することが如何に重要であるか」、「学園と関係して良かった」と熱く語っていたのが印象的であった。そこには学園に一本筋を通し、正しく導こうとする強い思いが伝わっていた。

一九九九（平成十一年）年、世紀末のこのときに関連した一冊の本が刊行された。『女たちの20世紀・100人―姉妹たちよ』と題され、「自分らしく生きることが、今よりずっと困難だった時代。さまざまな苦労や失意に立ち向かい、自らの生を輝かせ、私たちの歩く道を切り拓いてくれた女たちがいた」という趣旨で、矢島楯子、荻野吟子、津田梅子、安井てつ、らの錚々たる顔ぶれの中に、「初の女性検事」として選ばれたのであった。女性法律家としての先駆的役割が認められたわけである。

千恵子は、九十歳を超えてもなお弁護士業務、学園の理事もつづけていた。傍目からは、相変わらずエネルギーッシュで元氣そうに見えた。しかし、二〇〇四（平成十六）年七月、腹痛を訴え武蔵野赤十字病院に入院をする。大腸ガンによる腸閉塞であった。さらに、夫秀叡が二〇〇六年一月

十四日に九十四歳で亡くなったときは、流石に寂しそうであった。葬儀から間もないある日、筆者は「私が仕事をづけてこれたのは秀叡先生の理解があったからこそ」と語っていたのを記憶しているが、偽らざる心境であったにちがいない。

この頃から千恵子は体調の衰えが目立ち、翌二〇〇七（平成十九）年八月六日、自宅で家族に見守られながら九十二年の生涯を終えることになる。夫秀叡の元に旅立つことになったその顔はやすらかであった。

その人生は、女性に道を拓き、道を拡げてきた、芯の通った生き方であったといえよう。

後日、三鷹の自宅からほど近い禅林寺での葬儀には、白梅学園の関係者、卒業生が全国から駆けつけその死を悼んだ。

#### 〔参考文献および引用資料〕

- 『創立二十五周年記念誌』 白梅学園短期大学、1982年
- 『樋口愛子先生追悼録』 白梅学園、1977年
- 『学制100年史』 文部省、1981年
- 『女たちの20世紀・100人—姉妹たちよ』 集英社、1999年
- 出射義夫、門上千恵子『女性犯罪』 春秋社、1952年
- 田中未来『生きること育てること—日本の教育史の一側面』 福村出版、1987年
- 「九州大学法学部同窓会報第29号」 九州大学法学部同窓会、2004年
- 「しらうめ(学園60周年記念臨時号)」 白梅学園短期大学同窓会、2002年